

文部科学省初等中等主任視学官 嶋野道弘先生講演記録 演題「学力向上とこれからの学校・教師の役割」

皆さん今日は。今日は学力向上フロンティアスクールの研究発表にたくさんお集まりいただきまして、ありがとうございました。また、戸田第一小学校の先生方には本当にご苦労様でした。生き生きとした子どもたちの姿や先生方が自信をもって指導されている様子を拝見して、何か人事ではないうれしさを感じています。

さて、今日は「学力向上とこれからの学校・教師の役割」と題してお話をします。

新学校宣言

私のところに、今皆さんの所にも多分届いていると思いますが、最近文科省でもっとも新しいパンフレットである「新学校宣言」というパンフレットができていますけれども、これはこれからの学校を示唆する 1 番大きなパンフレットかもしれません。

つまりここには、こんな言葉が書いてありまして、「きこえてくるよ、みんなの声。つくろうよ、みんなの学校。新しい公立学校のしくみがスタートしました」ということで、コミュニティスクール、学校評議員制度、学校づくりというようなことがいわれています。これからの学校というのは、正にここに凝縮されているように、特色ある学校づくりであり、また学校の自主性、自律性、主体性を基盤とした学校づくりが求められているのです。

画一化する教育から学校の創意工夫を進める教育へ

これはもう世界的な動きですね。私はつい 12 日まで 10 日間ほど、ドイツ、イタリアの日本人学校を視察してきたのですけれども、そのときにドイツの学校改革の説明を聞いてきました。ドイツの学校改革も正にここにありまして、いかに画一化する教育から学校の創意工夫を進める教育に切り替えるかというのが大きな課題になっています。

なぜ画一化ではいけないのかという問題なのですけれども、それは国際比較調査、あるいは P I S S A という調査があるのですが、この調査などでも明らかになっています。画一、一律というところから学力向上は臨めないですね。やはり学校が創意工夫する中で、これから求められる学力というものがしっかり身に付いてくるというのが、いろいろな調査から明らかになっています。

従って、これからの学校というのは、そういう位置について、そして主体的な学校づくりを進めるということです。

けれども、その目指すところは何かといったら、やはり学力向上、学力育成ということになります。もとより学校は昔から学力を育成するところでありまして、このことを改めて再確認を世界中が今しているということですね。今後、そういった学校を支える教師には、より一層、教師の専門性が求められるということが予測できます。

例えば、昨日の新聞です。朝日新聞のトピックスに東京のある区が、総合的な学習の時間のプログラムを、教育課程を外部委託するというようなことが書かれていました。

前からですが、N P O 法人が総合的な学習の時間で学校に協力をして、地域住民が学校

へ入ってきていますよね。あの人たちとざっくばらんに話をすると、例えば、環境NPOは、「学校は忙しいですよ。先生方は忙しいですよ」と言うのです。「ですからもし環境をやるのでしたら、私たちが環境のプログラムを作りますよ。そうすれば、学校はらくになるでしょう」と言うのです。

だけど、半分はありがたいなと思いつつ、半分は弱ったなと思っていました。なぜなら、そういうふうに依存しすぎていけば学校教員の地位はどんどん落ちていくからです。先生はいらなくなっちゃう。

望ましいのは、そういう組織の専門性とまた、教育を司る教師の専門性がうまく噛み合っていくところに今までと違って、より質の高い教育の実現ができるのですけれども、そうでないところにもし位置付ければ、これは、学校教員はいらなくなってしまうかもしれない。こういう問題も抱えているわけですが、そういう中で私たちはこういうふうに今どこに向けて、第一歩を踏み出せばいいかということですね。

学校像の明確化とその不断の見直し ~ 取組構造図・ボトムアップ・学力づくり宣言 ~

従って、その中で大事なものは、今日この学校が出してくれたように、まず第一は、校長を中心にして、どういう学校像を描き出すか、そういうことを明確にしていくことだろうと思うのです。

今日この学校の全体発表を思い出していただきたいと思います。取組構造図というのがありましたね。トライアングルですね。学校・教師、そして児童、そして家庭・地域というのがありまして、これが三角形につながっていますが、これは三角形ではありません。トライアングルですね。

よい音を共鳴させてその中で子どもに確かな学力を身に付けていきましょう。これが戸田第一小学校の学校づくりなんですね。しかも、その理念はボトムアップでいきましょうということですね。

毎回の授業の積み重ね、その中に成功や失敗があっても、うまくいくこともいかないこともある。我々教師は毎日授業をやると、もう少しあの時こうしておけばよかったな、もっとこういう教材を工夫すればよかったなとか、しょっちゅう繰り返しています。それをただ繰り返しにするだけではなくて、みんなで持ち寄ってそれをテーブルにのせて、そしてこの学校としての授業づくりの考え方を作り出していく。これが、ボトムアップですね。

そういう中で先生方が自信を付け、問題を解決し、そして評価を確かにして、子どもにどういう力が付いているかを見るんですよ。

それが「学力づくり宣言」ということなんですけれども、こういうことを積極的に取り組んでいく、進めていくことがこれからの学校に求められている大きな課題であろうと思うのです。

そういう点でこの今日の発表は先鞭を付けてくださったということもいえるかと思えます。なお、こういった取り組みは常に今の教育界がそうですが、不断の見直しを怠りなく直して、検討、修正していただくのです。

戸田第一小学校でもこの「学力づくり宣言」や「取組構造図」、「ボトムアップ」というのを打ち出していますけれども、それで取り組みが止まってしまったらそこからすでに画一・一律が始まってくるわけです。こうなったらもうすでに元の黙阿弥になります

ので、毎年毎年、これは検討され、確認され、また来年度の自分の学校の学校宣言をしていかなければならないということだと思います。

そうってみれば、言われてみれば、言い尽くされているかもしれませんが、教育とか子育てというのは、やはり生き物なんですよ。教育は生きているものであって、生きているものに対しては画一的ではうまくいかないということは当然のことだと思います。

求められる学力の明確化 ～概念規定、そして子ども像へ～

さて今申し上げましたように、いかに学校はこれから社会の変化とともに変わろうとしても、学校が 1 番やらなければならないことは学力です。学力を向上させるということに他ならない。学校の 1 番の大きな使命はここにあります。

そこで今大事なことは、この求められる学力についての理解をもう少ししっかりしておかなければならないと思うのです。

この学力については、学力論争というものがあまして、学力低下とかいろいろな話がありました。しかし、これからの学力は何かと言われた時に、これはほとんど異論がなく、だいたい概念はできているんじゃないかという気がします。

それは皆さんも聞き慣れているとは思いますが、これからの学力というものは、知識・技能に加えて、思考力・判断力・表現力や学ぶ意欲を全て含めて学力というのです。

このことについて中央教育審議会なども開かれていますし、様々な方々の意見も頂いておりますが、学力はそうではないという人はほとんどいません。知識・技能に留まっていたはだめだ、知識・技能の量的なものではこれからはどうにもならないということは、ほとんど多くの人々が共通理解していると思います。

これは、ドイツに行っても私は確認してきました。

ドイツの教育界の 1 番目は、学ぶ力を育てるというのですよ。日本と同じじゃないですか。学べる子を育てるのですよね。こういった概念をしっかりと規定しておくことです。しかし、概念を聞いていただけでは弱いですね。

私は、私も含めて人間というのは、強い力に弱いというものがありますから、概念だけではなくて、この概念に基づき、こういった学力を身に付けた子ども像をしっかりと描き出しておかなくてはなりません。

1 人 1 人の先生が、事例は違ってもいいから、これから求められる学力を身に付けた子どもってこんな子ですよと、1 つ、2 つの事例を挙げて語れるようにしておかなければ、自分のものになったというふうにはならない。自分のものになっていなければ、ちょっと他の強い力に意見を言われれば、ずっずずと崩れるわけですね。

学力についての例示 ～アテネオリンピックを通して～

このことは例えば、この間の終わったばかりですが、アテネオリンピックを思い出してみましょ。あの入場行進の時に世界各国がプラカードを持って入場してきます。どうです、皆さん。相当の国の数がありますが、幾つの国の名前を知っていて、しかもその地図上のどこにあるか指摘できるでしょう。どのくらいいるのでしょうか。半分できませんでしょうか。むしろ、「あれっ、こんな国あったのかな」「この国どこにあるのかな」ということの方が我が家では多かったです。

学力 1 国のなまえや位置を知っていること

この時に、国の名前を知っていると、国の位置を示すことができるというのは、これは知識・理解です。これを 100% 知っているから学力が高いというのも確かにそうです。

しかし、それだけでしょうか。1 年も過ぎれば、また国の名前が変わったり、国がどんどんできたり統廃合したりしていきますが、世界はそれだけ揺れ動いています。

学力 2 国を調べようとする事

そうだとするならば、ある程度の国の名前や位置を知っているけれども、知らないという時に、地球儀があって、例えば家庭の居間に地球儀を持ってきて調べようとするというのも学力。自分の机の上に学校で使う地図帳がある。これで見ようと言って、地図帳を持ってくるのも重要な学力ですね。

国の名前を知っている、位置を知っている知識・理解、知らないけれど、地図や地球儀で調べようというのも学力ですね。

学力 3 国を効率的に調べられること

3 つ目にはそれが効率的に調べられる。例えば、無目的に地図を探しているのではなくて、後ろの索引を使ったり、あるいは、縦軸と横軸を見ていく、地図で素早く国を見つけられるというのも学力ですね。

学力 4 国の文化や習慣に興味を示すこと

そして 4 つ目に、さらにそういう国の民族衣装や入場行進のユニフォームを見て、いったいこの国にはどういう文化や習慣があるのだとうかと興味を示すのも学力です。

こういうふうに学力を規定したら、さらに幾つかのエピソードを使っていったい学力というのはどういうものなのだろうか、それを身に付けた児童の姿は、どんな子どもの姿が見えるのか。このことを 1 つでも、2 つでも 1 人 1 人の先生が語れるように、これが非常に大切だということです。そしてはじめて自分のものになるということです。その上に授業づくりが進むわけですね。

2 つの学力 ~ 「求められる学力」と「もてはやされる学力」~

さて、学力の育成についてもう一つ考えなければならないのは、「求められる学力」と「もてはやされる学力」というのがあるということです。これは、私なりの言い方なんです。が、「求められる学力」と「もてはやされる学力」が一致しているのが理想です。

ところが、往々にして世の中というのは、そういうものかもしれませんが、「求められる学力」と「もてはやされる学力」が大きく乖離している人もいます。あるいは社会全体がそういう状況にあるかもしれません。

学力とは知識・技能に加えて、ということは、みんな納得しているのに、しかし、表舞台上で学力を評価するといった時に、知識・技能・理解面だけを学力だと判断している、あるいは、学力向上フロンティアに取り組んでいる学校でさえ、計算の技能や漢字の量だけで学力を考えようとしているのではないかなという所も、ないわけではないです。これは、

「求められる学力」と「もてはやされる学力」が乖離しちゃっているのです。
なぜこういう乖離が起こるのでしょうか。バラバラになるのでしょうか。

2つの学力が乖離する理由1 ~ 学力の測定のしやすさ ~

それは1つには、学力が測定しやすいかどうかという問題があります。

つまり、「見えやすい学力」と「見えにくい学力」というのがあるわけですね。知識・技能というのは極めて見えやすい、そして測定しやすい。だからついここに行ってしまう。しかし、ここで1つ踏ん張らなくてはならない。見えにくいけれども何とかして見るようにしていかなければならない。これが質的な変換を図る大きな取り組みでございます。

2つの学力が乖離する理由2 ~ 学力の身に付けやすさ ~

2つ目には、身に付けさせやすいかどうかという問題がありますね。計算の技能は、ある意味では自主学習などによって、極めて身に付けやすい。マニュアル化もしやすいです。しかし、「考える力」などというものは、「考えなさい。考えなさい」といくら口でいったところで、「考える力」が身に付くものではありません。

そうすると、「考える力」を育てる、「考える力」が身に付く指導方法の工夫改善が行わなければならないのですけれども、なかなかまだこれは厳しいと思います。

2つの学力が乖離する理由3 ~ 経験的な問題 ~

3つ目には、これまでやってきているか、やってきていないかという問題もありますね。往々にして私たちは、これまでやってきたものについて、どうしてもしがみつがちです。これまでやってきたというものは安心です。しかし、まだ未知のことというものは、どうにも不安です。いったいこれでいいのだろうか、ということはありませんよ。

こういったこれまでの手順、これまでやってきたことにあまりにも固執していけば、やはり学力というのは、知識・技能に固まってしまう。このことをよく承知して、これからの学力育成というものを取り組んでいかなければならない。

この「求められる学力」と「もてはやされる学力」というものを1人1人の中でできるだけ一致させる。そういう取り組みが、構えが、私たちにとって非常に今必要になってくると思います。

学力向上にあたって必要な取組

さて、新学校宣言、そして2つ目に、「求められる学力」とは何かという問題を申し上げましたが、3つ目に移りたいと思います。

では、求められる学力の学力育成、学力向上にあたって、どういった取り組みが今必要なのか。また、この学力向上フロンティア校は全国にたくさんありますが。この学校は様々な研究成果を出してくれています。そういう中でどういう知見が得られてきているか。それを我々は自分のものにして自分の学校や自分自身に生かせばいいのですね。

そういう制度が今必要なのですけれども、それらの中の幾つかを申し上げてみたいと思います。

学力向上にあたって必要な取組 1 学校力 ~ 3つの視点~

まず、第 1 は「学校力」。こういう言葉は今、人間力、社会力とか、後ろに力を付けることが流行っているのですけれども、学校力が高まっているかどうかですね。

では、「学校力」が高まるというのはどういうことなのか、3つほど視点があります。

学校力 1 ~ 組織化 ~

1つ目はよく組織化されているということですね。学校はやはり集団組織体ですから、これが役割分担や責任、協力の点でよく組織化されているということです。

学校力 2 ~ 構造化 ~

2つ目には構造化されている。例えば、教科担任制をどこに入ればよいのだろうか、あるいは少人数指導や習熟度別はどの学年でやればよいのだろうか、あるいは中学年でやる場合は、高学年でやる場合はどこが違うのだろうか、同じでよいのだろうか。こういったことを整理することが構造化するということです。

総合的な学習の時間は、例えば、学ぶ力を育てるという達成目標をつくった時に、中学年における学ぶ力というのはどういうレベルだろうか、高学年における学ぶ力はどういうレベルだろうかを整理していくことが構造化するということですね。こういった構造化されているということです。

学校力 3 ~ 実践的な知見 ~

3つ目には実践的な知見を持つということですね。いろいろな実践がされていくわけですが、その中に例えばこの学校、戸田第一小学校は、ボトムアップという大きな知見をつくりました。けれど、もっと小さなものでもよいのですが、そういった知見がその学校にあるかどうか。

さて、組織化、構造化、実践的な知見という観点で私たちはこの戸田第一小学校を評価してみてもよいと思います。

また、戸田第一小学校の先生方は、こういった知見で自分の学校の学校力を自己評価、自己点検をしていくことが必要ですね。

こういうことをすることによって、1人1人が自分はこの学校を担っている1人だと自覚をもつことですね。取りも直さず学校力を高めるということにつながっています。

学力向上フロンティア等で非常に成果を上げている学校は、ほとんど学校力があるな、この学校には学校としての力があるなと感じさせてくれます。それを分析してみれば、今のようなことがいるのではないのでしょうか。

学力向上にあたって必要な取組 2

~ 指導方法や指導体制を工夫し適切に取り入れること ~

2つ目には指導方法や指導体制を工夫して適切にこれを取り入れる学校ですね。

今、全国の学校を歩きますと正にこの指導方法や指導体制は多くの学校で工夫されています。また市町村全体でこれを取り組んでいるところもありますね。

例えば、少人数指導を全部取り入れるとか、あるいは二学期制を取り入れるとか、あるいはティームティーチングを入れるとかですね。こういった工夫は相当進んでいる。

ただ問題は適切に取り入れるということなんです。ここのところが非常に重要です。

つまり、指導方法や指導体制というのは1つの形式です。少人数というのは1つの形ですね。形には必ず中身があります。この形式と中身をバラバラにさせたのでは効果が上がりません。適切に取り入れるということは、つまり形と中身を一体化させるということです。それによって、効果が出ます。

従って、少人数指導、習熟度別学習というのはいったい何のために取り入れるのか。少人数にすれば学力が上がるというふうに思っている人は、もういるのですけれども、しかし、とんでもない間違いです。そうであるならば、僻地の先生方には申し訳ないのけれども、僻地少人数学校はとっくに学力が上がっているはずなんです。

しかし、あの先生方は少人数であるがために多くの悩みを抱えているんですね。そうするととなるとただ少人数を取り入れる、習熟度という形式を取り入れれば、学力が上がるということとはとてもいえません。

少人数や習熟度を取り入れる本当の意味

では、少人数や習熟度を取り入れる本当の意味は何かといたら、きめ細かな指導ができるということです。では、きめ細かな指導というのは、単に子どもにたくさん言葉をかけるということでしょうか。いやいやそうではありません。

きめ細かな指導とは

きめ細かな指導というのは、いったいどういうことなのでしょう。このレベルまで具体化しないと適切な取り入れ方とはいけませんね。

例えば、きめ細かな指導というのを考える時に、1つはこういったことがいると思うのです。

子どものわかり方の段階をよく知っている。

子どもってこんなわかり方があるんだな、こんなわかり方の段階があるんだなということをよく知ることによって、その子どもその子どもに対応した適切な指導ができます。この程度までわかっているんだな、だから今度はこうする。そういうことが、わかっていることによって習熟度別ができてくるわけですね。

例えば、平行四辺形の面積は、「底辺×高さ」です。これについての子どもの理解の仕方を、ある学校でとても興味深い授業を見せてもらいました。

その中ではわかり方が6つぐらいあることに気づいたのです。

1つは感覚的に理解しているというのがあります。細かくはないけれど、例えばここに平行四辺形がありますけれど(図を操作しながら)、これをですね、こう曲がっていきませんか。斜めの辺を真っ直ぐにすればよいわけですね。長方形の学習はしていますから。ある子どもはこれをこっちから押しつぶしているから曲がっているの、これをもとに戻すにはこっちから押しやれば長方形になるんじゃないかといいました。

そうすると、高さはここになるんですね。このまま押ししていけば。でもある子は、それじゃあ何となく違うんじゃないか、どうもそうすると長方形が大きくなっちゃうのじゃないかと感覚的にわかっている。でもそれ以上はうまく説明できない。こういう段階が1つあります。しかし、これは大事なことでしょう。算数的な感覚を養う時には極めて重要

です。

2 つ目には、既習に当てはめて考える

つまり、「長方形は「縦×横」だから平行四辺形も「縦×横」でやるべきだ。だから、この斜めの線は縦にならないから、それを使っちゃいけない」と言うのですけれども、それまでです。じゃあ、いったいなぜこの斜め線は縦にはいけないのかをというところの説明には、まだまだちょっと時間がかかる。こういうわかり方ですね。

つまり、「縦×横」という公式が言えたから、あるいは「底辺×高さ」という公式が言えたから、これでわかったということです。もうちょっとよく確かめてやらないと、わかったかわかっていないかわからない。そういった積み重ねがもっとわからなくさせてしまうことになっていくのですね。

3 つ目には、操作してわかるという子がいます。

例えば、平行四辺形をよく紙で切ってあげますよね。そして、はさみで切って、これを長方形に等積変形させるわけです。面積を同じにして形を変えてやればいいんですから、操作をして、「あっこうすれば長方形になるじゃないか」と操作してわかるということです。

4 つ目は、操作したことを言葉できちんと説明してわかるという子がいます。

操作と言葉の間には、ずいぶんまだ、離れているんですね。操作してもなかなか言葉できちんとということは、難しいことです。でも操作してわかるということは、相当深いわかり方に接近していますね。

5 つ目には、質問されたことに適切に答えられる。

「なぜ、斜め線はだめなんですか。」と質問された時に適切に実証的に答えられる。これはほとんど完全にわかっているんですね。

それから 6 つ目には、わかるということをより深くわかるためには、わからなくなることもあるんだなということも承知しておく必要があるかと思います。わかるということは、いつも階段を上がるように、順序よくわかっていくわけではないんですね。階段に踊り場があるようにわからなくなっちゃうことはありまして、このわからなくなるということも、我々は、大切にしていかないと、もっと深いわかり方に気づくことはできません。こういった子どもにはいろんなわかり方があるぞ、この子は、今どのわかり方をしているんだろうということを承知することによって、よし、じゃあこの子には、操作させてみようか、この子には、操作したことを言葉で説明できるようにしようと、1 人 1 人に合ったきめ細かな指導があります。

つまり、置き換えて言えば、子どものつまずきどころをよく知っているということですね。指導のポイントが、わかるということになります。少人数や、習熟度を取り入れるというのは究極で、言ってみればこういった指導がよりしやすくなるということだと思います。ですから、形式だけをとってそれで、学力が上がると考えたらとんでもないということです。

40 人学級でも十分に学力が上がっているところもあるんですね。それは、やはり 1 人の先生が 40 人に対して、そういったきめ細かな指導ができていて、あるいは、先生が直接子どもに指導しないで、子ども同士で学び合ってしまうということがあるかと思います。

学力向上にあたって必要な取組 3

～教科担任制や T T 等の指導体制のメリット、デメリットの整理～

3 つ目には、教科担任制や T T や指導体制の工夫というものは相当に進められている。では、その教科担任制や T T は、これも今申し上げましたように、こういった形式に沿えば学力が上がるかといえばそれはとんでもないことです。今日、この学校が出してくれた着目する利点は、メリット、デメリットをきちんと整理していることです。「良薬は口に苦し」と言いますが、非常に効果があると思っているものであってもちょっと視点をかえれば、デメリットも必ずあるわけですね。だから、新しく創意工夫する時には、何がメリットで何がデメリットか、リスクは何かということをよく承知しておくことが必要だと思えますね。そして、そのリスクをできるだけ軽減しておくことが全員で志すことですね。

そういった戸田第一小学校の取り組みというのは、非常にぼくは、思慮深い取り組みをしてくださったな、形式に流されない本質をどうするかという取り組みにきていると思います。

教科担任制や T T は、言ってみればそれは、その意味はどこにあるかということと教師の個性や特性を生かす、すなわち、なお一層先生 1 人 1 人が持っている専門性や、あるいは、趣味。趣味も含めていいと思いますが、趣味や特技を生かしていく。これを学習指導に反映させようということですね。算数が好きな先生が算数を教える。これはやっぱり楽しくできますよ。私の小学生時代を考える時、担任によってずいぶん理科が好きになったり、国語が好きになったりしたという記憶があります。

5 年生の時、担任は理科だったんですね。あの白衣を着ている姿だけでかっこよく、理科の実験がしたくて仕方がなかったんですねけれども……。そういうことってあるんですね。それは、形式的なことですが、これが、もう少し内容や方法によく先生が精通していれば、これはきめ細かな指導、あるいはわかる楽しい授業というものが可能になってくるんですね。

ですから、教科担任制や T T というのは、そういった教師のもっている個性や特性、あるいは趣味や、あるいは専門性が生かせるような組み合わせ方ができているかどうか。あるいはチームを組んだ時に、そういった教育者同士の認め合いがあるかどうかという問題があると思います。単に、分離分担という発想はなかなか効果が上がらないと思います。

学力向上にあたって必要な取組 4 ～教材や教具の工夫・改善～

4 つ目には、教材や教具の工夫・改善ということです。きめ細かな指導や教師の専門性を生かした指導は、教材や教具の工夫や改善を進めます。

学力向上フロンティア学校に大きく期待したいことの 1 つにこの教材や教具の工夫・改善があります。それは正にボトムアップ論、必要感に迫られた開発するんですね。

先程平行四辺形の面積の学習を通して、子どものわかり方についていろいろ学校の先生方と話し合ったというお話をしましたね。

しかし、この時の授業はどうしても斜めの線が高さにならないということが証明しきれなくて授業はそこで終わってしまいました。「どうしてこの線は高さにはいけないのだろう」、その時に求められたのは、これをうまく説明する適切な教材です。あるいはコ

ンパスが 1 本あれば先生は黒板に説明できましたし、子どもに説明させることもできたのではないかと。

例えば、この線をコンパスに沿って、ここからずっと移動させてここにやる。完全にここからはみ出している。つまり、面積は大きくなってしまふ。ここを高さにしてしまえば、正しい面積がでないことがはっきりするのですけれど、それを子どもに言葉でいくら説明をしようとしても、先生自身もなかなか説明できない。コンパスがなくても教室にヒモが 1 本あれば、このヒモを使ってこういうふうになんか（実際に図を使いながら）説明すればわかるんです。つまり長方形と面積が変わってくるということがわかります。

しかしどうでしょう。ぼくはこれは今日、教室をまわって見つけたんですけれども、戸田第一小学校の自作教材があります。川和田先生よろしいでしょうか。

私もですね。実はそういうものが幾つかあるんですね。かつて授業をやってましたから。

例えば、社会科ですね。等高線の指導がどうしてもうまくいかない。等高線が密になっている所は急斜面、粗になっている所は緩斜面であることを、立体から平面に置き換えるという学習がなかなか子どもに身に付かない。何とかこれを教材開発して、ぱっとイメージをわかせるものにできないか。そこで思いついたのは提灯でした。たたむじゃないですか。これを持ってくれば絶対にいいだろうと。紙は抜いちゃったんですね。ところが失敗でした。あの提灯は 1 本の竹ヒゴがグルグル渦巻き状になっているんです。だから、等高線にならないのです。でも大丈夫です。それを切ってますね、そして大きい輪からつないでヒモでつないでいけばいいわけですから。提灯を改良して、等高線説明器というのを作ったのです。ずっと提灯を広げるとちょっとひもの付け方を変えればいいわけですから。こちらが斜めで、こちらが急な、こういったなだらかなになります。そしてポンとおきますと平面になります。急な所は密になって、なだらかな所は粗になってくるのですが、これでまた地図を見せていくのですね。

こんな教材や教具を開発したことがあるなと思ったような気がしました。

つまりこれは、何とかして子どもにわからせたい、わかるようにさせたい。先生わかった。何とか霧が晴れたみたいだ。こんな気持ちにさせたい。という強い思いが、こうした思いが、こういったことへの取り組みになります。作った方も作る時にはいろいろ悩みます。車で通ってましたら、踏切ではちゃんと停車しますけれども、電車が通る間に踏切が上がっても、なかなか発進しないで後ろから「プッー」と言われたりすることも何度かあったわけですが。

しかし、子どもがやはりわかってくれた時には非常にうれしいですね。こういった工夫・改善というものが進められていく。これにも大きく期待しています。

学力向上にあたって必要な取組 5 ～学習意欲を高めること～

さて、5 つ目に特にこれからの学力を上げていくためには、学びへの動機付けともいえる学習意欲を高めるといことが求められています。

今日この戸田第一小学校の紀要の中にも初めのところに書かせていただいたのですけれど、この 4 番目の所ですね。学習への動機付けを図るとともに子どもたちの学習意欲を高めることが大事である、ということが言われていますから、これをまず書いたのです。この時に私たちは、もう一度思い起こさなければならぬことがあると思います。

それは動機付けには 2 つある。

1 つは外発的動機付けです。そしてもう 1 つは内発的動機付けです。これはどちらがよい悪いではなくて、これらをうまく連関させていくものですね。

例えば、小テストやドリルなどを使って、子どもが伸びていく状況を明確にわからせるようにしていくというのは、外発的な動機付けです。だから小テストを何回も繰り返し、そしてきめ細かな指導をしながら点数がどんどん上がっていく。こういった実感を持たせることは子どもを学びへ動機付けていくのに非常に大切です。

しかし、そこだけに安住していれば、やがて子どもは成長し、いつかどこかで何のためにこんな計算をするのだろう、計算練習して何の役に立つのだろうと思う時が必ずあります。その時もなおかつ、外発的な動機付けに頼っていれば、あるものは学びから離れていってしまう。やはり有用性、算数ができてよかった。算数は便利なんだといったような生活の中に役立つという実感を、どこかでさせてやらないと子どもが学びから離れてしまう。

外発的動機付けと内発的動機付けをうまく連関させ、そしてやがては内発的動機付けに移行していくといったようなことが必要になってきます。これは子どもの発達とも関係しますね。低学年の子どもは外発的動機付けがわかりやすいし、子どもの発達にも合っていると思いますが、高学年や中学生になってきた時に、相変わらず外発的動機付けをやっていたら子どもが離れていくでしょう。

例えば、どういうことがあるかといったら、これはよく事例でお話するのですが、総合的な学習の時間で学校自慢というのをやる時にですね、学校にある昔からの大きな木を自慢だという子どもがいて、この木を調べようということになりました。

この幹の太さはどのくらいか、これを巻き尺で測ればいいのですが、幹がわかれば高さを知りたいですね。てっぺんまで行くことはできない。その時に、子どもはどうしたかという、今の子どもですね。デジタルカメラを持ってきて、銀杏の木の下にグループの 1 人が立って、これを遠くからカメラで撮って、何ちゃんの何人分とやったわけです。そして、何ちゃんの身長を測って、かける何倍ですね。そしたら別の子どもは、夕方校庭に影ができる。この影を使って、同じ時間にグループの子どもの影を測って、そして何ちゃんの何人分としてかける幾つ分とした。

この後に子どもたちが言った言葉がどうも離れない。「先生、算数を知っていると便利だね」先生は聞きます。「どうして算数は便利なの？車は便利だけど、算数が便利ってよくわからないな」「だって先生、木に登らなくても、木に登って怪我をする心配もないし、怒られることもない。算数を知っていれば、机の上でいろんなことがわかっちゃう」って言うのですね。

これは算数の有用性というものに子どもが気づいたんですね。こういうことは、また算数の学びの意欲を高めることだと思うんですね。こういったことはたくさんあるんですね。

これも川崎のある学力向上フロンティアスクールで見たのですが、比べるという授業でした。低学年です。思い思いに粘土で作るのです。低学年の子どもですから、作れば比べたくなるというのが子どもの発達の特性です。隣の子と比べてどちらが長い。自分が長いと自慢します。2人で比べれば3人で比べたい。3人で比べれば、4人で比べたいわけです。そしてまわりの子と比べ終わると、クラスの向こうの方に好きな友だちがいれば、

ちゃん比べっこしようと言って席を立てて行きます。

ところが残念ながら、粘土ですからへビは切れちゃいます。比べられないんです。その時に教室の空間に先生が置いたのですが、適当なヒモだとか、いろいろ置いてありました。

子どもはそれを見つけて、「先生、これ使っていい？」って言って、どうするかと思ったら、そのヒモで自分のへビの長さを調べて、このヒモを持って歩いて、いろいろな所へ行って調べていきます。このヒモ 1 本あれば、クラスの全員と比べられるわけですね。

つまり、比べるということは何か基準があれば大丈夫。物差しがなければ比べられないというのは学力が弱いんです。

こういった有用性というものに気づかせていくことも学びへの動機付け、そして、学習意欲を高める上で大切なことですね。

今、中央教育審議会が開かれているわけですが、特に国語や算数などの各専門部会が開かれている中で、教科専門部会で主な意見をまとめたものがここにあるのですが、その中でこういう意見があります。

学力の向上を図るために、有用性あるいは実用性を教えるためには、教師自身が社会に学問がどう生かされているかを学ぶ必要があるのではないか。

学問というのは社会の様々なところにちりばめられているわけですがけれども、もう少しそれを意図的に学んで学習指導に生かすということも必要になると思うんですね。

学力向上にあたって必要な取組 6 ～適切な評価の導入～

さて、6 つ目になると思いますけれど、この習熟度やあるいは少人数などのきめ細かな指導を実現していくためには、どうしても適切な評価が導入されなければなりません。

観点別学習状況評価の実施

例えば、きめ細かな指導や基礎基本を確実に身に付けさせる指導を行うためには、1 つは分析的な意味をもつ観点別学習状況の評価を行っていないと、なかなかきめ細かい指導はできません。

例えば、算数の計算ができなかったといった時に算数的な感覚が育っていない。あるいは、小数点の付け方がわからない。あるいは明らかに練習不足である。といったように、これは分析的な意味をもつ観点別評価というものを導入していかないと見えてこない。

目標に準拠した絶対評価の実施

それからもう 1 つは目標の実現状況を捉える目標に準拠した絶対評価を導入せざる得ない。評価規準を作るということはとてもやりにくいと思いますが、今十分これは定着しつつある。なぜならば効果が上がってきているからですね。

つまり、子ども 1 人 1 人にきめ細かな指導をするにあたって目標に照らしてこの子どもが不十分なのか、概ね満足なのか、十分いつているかということ教師が適切に捉え、そしてその子どもにはもう少しこういう教材を与えよう、あるいはもっとこういう教材を与えよう、それに基づいて習熟度別に分けてみようというように、効果がでてきているからなんですね。

説明するまでもなく相対評価には相対評価のよさがあります。

しかしあれはどうしても集団に準拠していますから、集団のレベルによって子どもの学力状況が違ってしまいます。集団が低いところでは目標に到達していなくても高い子どもがでてしまうんですね。こういった意味でこの評価の適切な導入ということが重要です。ですから、特に習熟度を導入するのに、単にレディネステストをしたり、はじめに組み分けテストをして、組み分けをしてしまったというような状況では大きな失敗をしています。

ある町では習熟度を取り入れたために、塾通いが極端に増えたという例があるんですよ。それはなぜかということ、まだその単元に入る前にテストをされちゃう。だとすれば、親としては親心はどうでしょうか。少なくとも、少しでも上のクラスに入れたいというのが親心です。

それはどこで指導が行われているのでしょうか。学校はもうテストですから、そうすると塾に行くしかない。これは大きな間違いですね。やはり基礎基本、少なくとも指導要領に入っている内容というのは、基礎基本ですから、どの子にも確実に身に付けさせる必要があります。

これをきちんと指導するには評価を導入して、そして適切ところで習熟度に分けてほしいと思います。これはおそらく子どもも満足してくれるでしょう。

学習指導のセンスと技術

さて最後に学習指導のセンスと技術という問題に触れておきたいと思います。これからは、冒頭に申し上げましたように、求められる学力と、もてはやされる学力が乖離せずに、これを一体化させていくためには、どうしても私たちも学習指導のセンスと技術といったものをもう1回戻り直して、これを分析し直さないといけない。

自己評価・自己点検の重要性

私も立場上いろんな先生にお会いします。その中で優れたセンスと技術をもっている先生とは、共通的に自己評価能力が高いですね。

つまり、言われなくても自分の学習指導に関する自己点検、自己評価をしているんですね。ぼくは本当にそう思います。

そこでこれをもう少しその人のものだけにしないで、共通化するというのもいいと思うのですね。

例えば、自分自身の学習指導についての自己評価、自己点検の視点をもってみる、あるいはそれを学校で作ってみる。こういったことをして、1人1人がときおりそういうものをもって、自分というものを鏡に映してみるといったことが必要なのかと思います。

優れたセンスと技術をもっている先生1 ~子どものエピソードをもっている先生~

例えばですね、こんな視点が考えられますよね。学習指導や学習活動に関する子どものエピソードを幾つかもっている。こういう先生はかなりいいセンスをしています。

例えば、算数のこういう場面の時の、子どもはこんな間違いをしているとか、そういったエピソードを幾つかもっているということですね。

優れたセンスと技術をもっている先生2 ~子どもについて語ることができる先生~

2つ目には1人1人について何らかのことについて語ることができる。Aくんはこうだったな。Bくんはこうだったな。Cくんはこんなところもよさがあるなということですね。

私は少なくともそれが十分とはいえないけれども、1人1人について聞かれたら語ることができるよ、あるいは思い出せば顔が浮かんでくるよ、といったことです。

優れたセンスと技術をもっている先生3

～1人1人について対応の仕方を心得ている先生～

3つ目にはそれに関連して、1人1人についての対応の仕方を心得ている。子どもによっては強く叱っても大丈夫、子どもによっては丁寧に関わってやらないといけない子もいる。いろんな子どもがいますけれども、そういう1人1人の子どもの対応の仕方があります。

優れたセンスと技術をもっている先生4 ～学習内容についてよく知っている先生～

4つ目には、学習内容についてよく承知している。例えば、どういうことかということ、どうして生活科で遊びをやるんですか、と言われた時に、遊びはこういうことですよ、こういう意味があるんですよと説明ができる。

体育でどうして跳び箱をやるんですか、生活の中にないじゃないですかと言われた時に、跳び箱にはこういう意味があるんですよといったようなことを説明できる。

優れたセンスと技術をもっている先生5 ～指導のポイントを知っている先生～

5つ目には、指導のポイントを知っているということですね。例えば、先程の平行四辺形の面積を出す時に、1番のつまづきどころはどこかということ、斜めの線と縦の関係がよくわからない。このあたりが1番のつまづきどころで、これが解釈できれば、ふっと子どもは理解できてしまうのですが、どこかにそういったものがあるので、そういうものを幾つか心得ている必要がある。

優れたセンスと技術をもっている先生6 ～自作教材をもっている先生～

6つ目には、自分で工夫した教材や教具を幾つかもっている。私はこういうワークシートを工夫している。私はこういう教材をオリジナルで作っている。そういうものがあるといいかもしれない。

優れたセンスと技術をもっている先生7 ～学校の出来事を振り返る先生～

7つ目には、授業が終わったり、子どもが帰ったあと、あるいは家に帰って多少1人が2人、子どものことが思い浮かんでくる。ぼくは悩んでいる先生の方が確かな学習指導をしているように思うのです。やはり、子どもって育てますから、生きてますから、こういってこれでいいということはないんですね。適切な指導をしても、なおかつ、もっとこうすればと思うことがあるのですけれど、こういう悩みをもっているかどうかというのも自己点検、自己評価となります。適切かどうかはわかりませんが、少なくとも優れたセンスや技術をもっている先生と話し合ってみると、そういった振り返りをよくされている。そういう中でセンスや技術が育つのですね。

センスと技術に対する誤解

そして、センスと技術というのは特に大事なものは、特にセンスについては誤解が多いのです。指導のセンスについては誤解が多いのです。指導のセンスというのは、もって生まれたものと考えの人がとても多いのです。どうしてあの先生はあんなに子どもの見取り方がいいのだろう。どうしてあの先生は子どもがあんなによくわかるのだろう。

これはあの先生がもって生まれてきたものじゃないかなと考える人が多いのですが、しかし、それはね、はっきり言って違います。センスも技術も大事なものは、子どもや学習指導への興味・関心と理解と習熟ですね。子どもへの興味・関心そして感情、それを全部繰り返している。子どもって面白いとか、子どもってこんなふう考えるのか、なるほど、これは子どもだなとか、そういう興味・関心をもって感応する。それを繰り返す中で、その先生のセンスが磨かれていく。

また、技術というのは知識ですね。やはり技術には教材や学習内容が身に付いている。知識をもっていることである。そして、知恵です。技術というのは使いこなす中で生まれてくるものですから、先輩や優れた先生の技術を盗んで、やはり知恵なんですね。

板書が早いという先生もいます。それはもって生まれたものではなくて、やはりコツなんですから、その先生が身に付けた技術を、それを使っていく中で身に付いていくわけです。少し口幅ったいようなことを申し上げましたけれど、これからの学校、そして学力向上にあたって学校や教師はどういう取り組みをすればよいかということのを少し考えた一環を申し上げ、さらにこの戸田第一小学校が3年間本当にまとまった成果のある取り組みをしていただき、これは、またいろいろなところで生かせるというものを頂いています。感謝を申し上げて終わりにさせていただきます。